

友好の架け橋、タイへ！



八千代こども親善大使、バンコクで友情を育む



▲ワット・ラドニコムタム学校で多くの人から歓迎されました

市内小中学生12人の大使が「友好の架け橋」としてバンコクを訪問

今年度、市内小学5年生と中学2年生から選ばれた12人（小学生9人、中学生3人）のこども親善大使が、約1,400人の応募者の中から選ばれました。大使たちは、昨年7月からの事前研修でタイの文化や言語を学び、八千代市とバンコク都を結ぶ「友好の架け橋」としての自覚を胸に、訪問に臨みました。

笑顔と好奇心で繋がるタイでの貴重な体験

バンコク都知事などへの表敬訪問では、大使たちは練習を重ねたタイ語で堂々と自己紹介を行いました。タイの国旗の意味や、バンコク都の花、そしてバンコク都のお寺の数など、熱心に質問を投げかけました。また、バンコク都知事からは、両都市の人口や面積、タイ語で「美味しい」は何と言うかなどのクイズが出題され、両都市の違いやタイに関する知識を深めました。



▲知事に質問を投げかける大使たち

現地の学校では、温かい歓迎ムードの中、日本とタイの国旗を掲げた児童・生徒たちとの交流が実現。伝統舞踊、迫力あるムエタイ、心に響く音楽、創造力を刺激する美術、そして五感を満たす食事体験など、多彩な文化体験に目を輝かせました。タイの児童・生徒た

今年も八千代こども親善大使一行が、1月21日～28日に7泊8日の日程でタイ王国バンコク都を訪問しました。八千代市とタイ王国バンコク都は、平成元年からこども親善大使による相互の交流を続けており、今回で34回目の訪問となりました。

ちに教わりながら、ムエタイに挑戦したり、タイで守護神とされる鬼（ヤック）の顔への色付け体験などを通じて、異文化への理解が深まりました。大使たちが披露した、力強いソーラン節や、タイでも親しまれている日本の音楽に合わせたダンスは、会場を熱気に包み、大きな歓声が沸き上がりました。

タイの「家族」と深めた絆 ホームステイでの感動体験

大使たちは、3泊4日のホームステイを通して、タイの家庭の一員として、温かい生活文化に触れる貴重な機会を得ました。



▲ホームステイ前にあいさつする大使

また、ホストファミリーは大使たちのために様々な文化体験を用意してくれました。言葉や習慣の違いに戸惑う場面もありましたが、ホストファミリーの優しい笑顔と心遣いに触れるうちに、国境を越えた「家族」のような絆が育まれました。

交流の証として、共に歌い継がれてきた「心に花を」を歌い、別れを惜しんだ最後の夜のさよならパーティー。慣れない環境で勇気を出して新しいことに挑戦し、仲間と共に日本や世界について広い視野で考える機会を得た大使たちは、この訪問で大きく成長しました。

ジェスチャーや笑顔を交えながら思いを伝え合ううちに、言葉の壁を越えた友情が芽生え日本とタイに広がる友情の輪は、今後も世代を超えて紡がれていくことでしょう。

こども親善大使を通じて日本とタイに広がる友情の輪はこれからも広がり続けます。



▲さよならパーティでは「心に花を」を合唱

タイで学んだ大切なこと



親善大使代表
八千代台西中学校2年
大場 菜月さん

私のタイの派遣の一番の学び、それは「人と出会い、繋がること」は決して怖いものではないということです。初めは言語の「かべ」を大きく感じ、会話を続けることが出来ずにいました。ただ、タイの人々が一生懸命私たちに想いを伝えようとしてくれる姿を見て、私も自分の想いを伝えたいと心から思えたのです。相手のことを知ろう、自分のことを知ってもらおうと、笑顔で会話を重ねていけば短い期間だったとしても人と人は心で通じ合える。「人と出会い、繋がること」は一見怖いようにも思えます。でもそれは私自身が勝手に作りだしていた想像だと気づくことが出来ました。勇気を出して一歩踏み出し、相手のことを知ろうとすること。これこそが本当の認め合いに繋がる一歩だと私は思います。このタイの派遣の学びと思い出、そして出会いは私の中で一生輝き続ける宝物です。

広告

広告